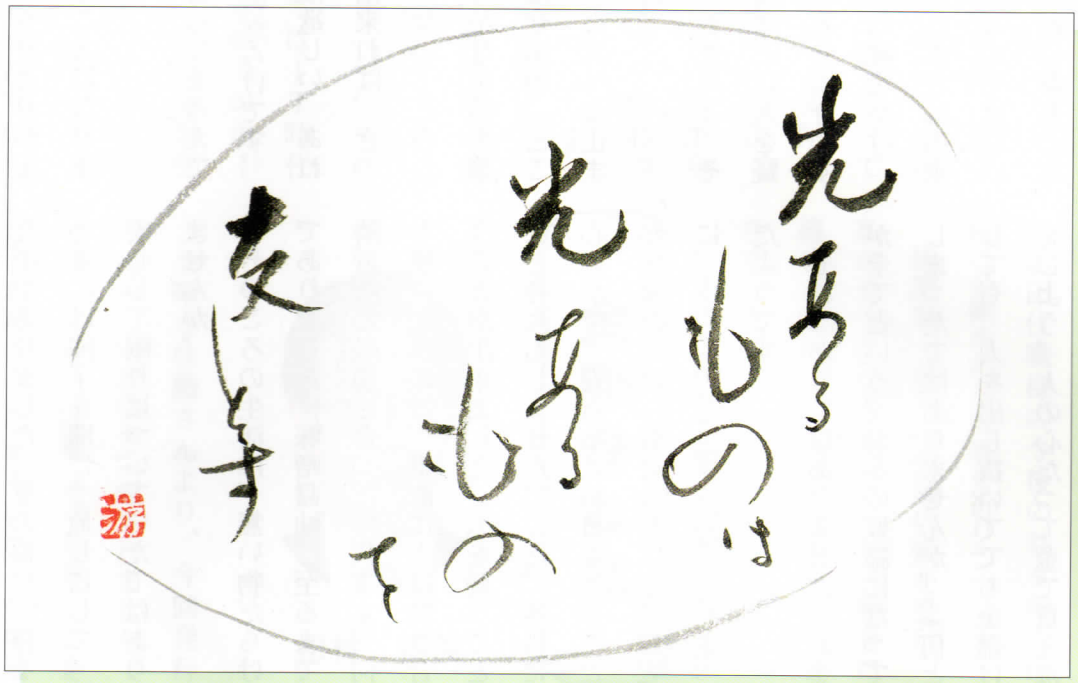
道

発　行　真言宗豊山派 霊松山歓喜院
金　剛　寺
〒371-0241　前橋市苗ケ島町1147
TEL 027(283)6918　FAX 027(283)6815
http://www.raijin.com/kongouji/



不幸への方程式

時宗青蓮寺　本間　光雄

私たちはこの世に『人』として生を受け、誰しもが幸せになりたいと願っています。幸せになるためにと、懸命にがんばっているのにも関わらず、なんだかますます不幸になってゆくように思えてなりません。

最近になって、特に殺伐とした事件が多発しています。親を殺す、子どもを殺す、隣人を殺す、考えられないような事件が後を絶ちません。人をだます事件も、残念なことに沢山発生しています。

こんな状況になることを一体誰が望んだでしょうか。誰一人として望んだ人はいないはずです。それなのに状況は悪くなるばかりではないでしょうか。

時宗は鎌倉時代の末に活躍した、一遍上人を開祖とするお念仏の宗旨ですが、『捨て聖』と言われています。平安時代の末、京都にあって念仏の教えを説かれた空也上人のことを大変慕っており「我が先達なり」と言っておられます。

その空也上人のお言葉に『籐衣紙衾これ浄服、求め易くして盗賊の恐れなし』があります。籐の繊維で作った粗末な衣、紙で作った着物、これらは身も心も清らかにしてくれるものである。しかも盗賊にねらわれることもない。

この言葉を口にするとき、ゴータマシッダールタ王子（お釈迦様）と出家者のやりとりを思います。

「あなたはそんなみすぼらしい姿でいるのに、どうして晴れ晴れとしたお顔でいられるのですか？」

「私は出家をして身一つで修行に励んでいます、何物にも囚われることがないから心が悩まされるこ

とはありません」このやりとりが王子を出家に向かわせることになります。

さて今の私たちの暮らしを考えてみましょう。欲しいものだらけです。あれが欲しい、これが欲しい。あれを手に入れることが出来れば、きっと幸せになれるに違いない。こうしてがんばって、今の豊かな生活を築いてきたのではありませんか。ところが欲しいものは次から次へと止まるところを知りません。

豊かな調度品やアクセサリー、それらが手に入れば入るほどに人を疑うようになりました。家を留守にする場合には、しっかりと鍵をかけ、それでも不安を消し去ることは出来ません。常に『盗まれるのではないか』という思いに囚われ、身も心も安まる時が無くなってしまっています。

つい四・五十年ほど前はどうだったでしょうか。家を留守にするときだって鍵などかけようともしなかった頃がありました。夏の盛り、寝るときには障子を開けっ放しにして、安心して眠りについていたではありませんか。

そのころの生活は、無い物だらけでありました。味噌醤油に至るまで隣近所と融通し合った時代です。何も無いときには、素直に人は助け合うことが出来ました。人を疑うことなど考えもしませんでした。本当に心豊かで、安らかに毎日を送ることが出来たのに、豊になればなるほどに、求めた幸せは遠くになってしまったようです。

そればかりではありません。お金が全てという、お金の奴隷になってしまったではありませんか。『何としても、人を出し抜いてでも金儲けをしよう。人の心だって金で買えないものはない。』そんな風潮がはびこっていないでしょうか。

ここらで、ちょっと考え直してみようではありませんか。

金剛寺回想

前原　克司

梵鐘の音

ゴーン、ゴーン・・・・!。

私は、金剛寺の西方約四〇〇メートルほどの我が家に聞こえてくる金剛寺の「朝の鐘」や、「昼の鐘」を聞きながら育ちました。

夜明けの鐘、昼食を告げる正午の鐘の音は、腕時計など持てない時代だった村人にとっては、金剛寺の厳かな鐘の音は、正に「時を告げる大時計」の役目も果たしていたようなものでした。

このように、古くから村人に親しまれてきた梵鐘が、昭和十七年『戦争に勝つために!。』と、軍事用資材に供出されてしまったのでした。

それ以来、梵鐘の無い鐘楼の姿に接する度に、物寂しい想いをして来たのでした。

それから三十有余年を経て、「金剛寺の鐘の音を聞けるようにしよう!。」という村人の渇望によって、村内外の協力を得て、昭和五十一年に再現され、再び「金剛寺の鐘の音」が村の家々に響き渡るようになり、村人の喜びは一入だったと思い安堵したのでした。

戦時下の学童疎開

国民学校高等科二年生（昭和十九年の夏）のことでした。

太平洋戦争が激しくなって、米軍の空襲を逃れるために、東京の王子国民学校の児童六年生八十三名が、金剛寺に疎開してきたのでした。

疎開児童を迎えるに際し、村関係者や、苗ヶ島地区児童による歓迎の対面式が、金剛寺本堂前で行われました。その対面式にH君が児童代表として挨拶する予定だったが、当日欠席でその役が私にまわってきて挨

挨したとのことだが、未だに記憶が定かでないのです。

親元を離れて、厳しい生活を強いられた疎開児童も、翌年には終戦となって帰って行ったのでした。

花見祭りの頃

四月八日は「釈尊花祭り」で、お寺で甘茶を頂いた。そして、四月十五日は苗ヶ島神社の祭典日で「花見祭り」とも言った。金剛寺の参道の両側の桜が満開に咲き、露天商が軒を連ねて、村内外から多くの花見客が訪れ、大変賑わったものでした。

花見祭りが過ぎると、農家にとってはいよいよ本格的な農作業の多忙な時期を迎えるのでした。

金剛寺情報

住職（志田洋遠師）はＩＴ時代にいち早く対応し、金剛寺のホームページを開設して、逐次活動状況を情報発信して下さっておられます。

古里を遠く離れて暮らしている檀信徒の方や、金剛寺にゆかりのある関係者にとって、居ながらにしてその情報を察知することが出来て、大変有難いことだと思います。

志田住職様の今後の益々のご活躍と金剛寺のご発展を祈りつつ・・・

金剛寺と私

松村　博美

機関紙「道」の原稿依頼を受け、私の七十有余年にわたる金剛寺に纏わる回想の一端を述べさせて頂きました。

金剛寺住職さんより、今回発行の「道」の原稿を依頼されました。しかし、私には無理であることを言いお断りいたしました。一体何を書けばいいのか全く分かりませんでした。また、仏法に関しては何も知識もなく、金剛寺に対して今まで何も協力をしていません。

私事ではございますが、三十八年間の県立高校教員生活を終え、今後（老後？）の事をどう生きるか、何をすべきかを考えました。その中の一である両親の位牌があり、仏壇を購入していました。しかし、開眼供養をするという事を知りませんでした。平成十五年の夏、お墓を購入しました。その時、お墓も開眼供養をしなければならないことを知りました。そこで、金剛寺住職さんにお願いをした次第です。

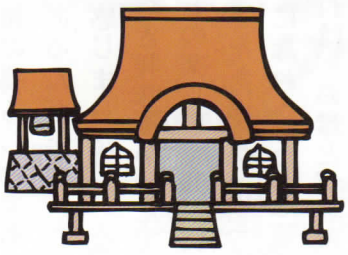
住職さんとは、小学校と中学校と同学年であり、同じクラスも何回かありました。そのため私的には、お互いに名前は呼び捨てで呼んでいます。

そこで、洋遠和尚に私が関係している地元高齢者教室の講師を依頼しましたところ、快く引き受けていただいた次第です。

私の祖父は、苗ケ島町の出身であり、大前田に居住し、檀家でした。当然父も金剛寺の檀家でありましたが、この機会に改めて私が檀家になった次第です。

また、前住職の賢尚先生は小学校の恩師であり、私の父と同僚でもありました。そんな関係もあって金剛寺には、昔からお世話になっています。

私は、仏法については何も知識はありません。檀家になり、何をどうすれば良いか全く分かりません。これからは、いろいろと仏法について勉強していきたいと思います。



お琴とソプラノジョイントコンサート

仏教と鳴らし物

吉井町
後藤　加代子

境内に一歩一歩、足を運ぶにつれ子供の頃、お墓参りをした記憶が戻って参りました。

風習の違いでしょうか、私の育った所では、夕暮れと共にお墓参りに出かけていました。低いざわめきと、ゆらゆら揺れるちょうちんの灯は、映画のワンシーンのように覚えています。

そこだけ、ゆっくり時間が流れ、幻想的な世界を懐かしく思い出された瞬間でした。

日頃、お寺とはご縁がなく、まして、お寺でコンサート?・・・。どんなものか、想像もつきませんでした。

歴史ある古い佇いは、お箏の存在をひきたて、ソプラノの歌声を優しく包み込んでいるようでした。ある意味、ミスマッチ?と思える響きは、マイクを通さないことで、返って趣きのある心地良いものがありました。

また、ご住職のお話は、とても解り易く、興味深く拝聴いたしました。お話の合い間に聴いた鐘の音色は今でも聴こえるような錯覚があります。とても悲しい響きは「諸行無情の響きあり・・・」を思わせる物がありましたが、実に静かで重みのある音色は、このところの心の煩わしさの中に僅かな光をいただいたような感動があり、どこまでも余韻を追いかけて行きたい思いにかられました。

この様な機会がまたありましたら、もう一度、聴かせていただきたいと思っております。

今回、お寺でのコンサートは初めての体験でしたが、段差もなく、温度差もなく、非常にゆったりとした時間を過ごすことができ、よい企画だと思います。

次回は、落葉の季節にフルートあるいはバイオリンの音色が聴けたら・・・と希望しつつ、今後の企画を楽しみに待ちたいと思います。

イベントに参加して

丸若　美和

今回このコンサートには、母が券を準備してくれていて行きました。お琴とソプラノ?・それもお寺で?と、とてもめずらしい組み合わせだなと思いました。

当日、お寺に入って「これすごいね。」と母に言ったのは欄間を見てでした。修学旅行などで行ったお寺しか見たことがなかったため、こんな近くに歴史を感じるお寺があるとは思っていなかったのでおどろきました。そんな場所での、日本的なお琴と、マイクを通さない歌声は、違和感なく、ここちよく耳にはいりました。

鳴らし物についてのご住職の説明では、あれは、そういう時に、そういう意味で鳴らしていたんだとか、この音は初めて聞く音だとか、同じ種類の鳴らし物でもこんなに違いがあるんだとか、さまざまなことを感じました。いろいろ教えていただき興味深かったです。

コンサートの楽しい時間が終わって、何だかあたたかく、ゆったりした気持ちになれたような気がしました。それは、お琴と、歌声と、ご住職のお話しはもちろんですが、このコンサートの余剰金が、社会福祉に役立てられるということで、出席しているだけで何かの役に立てていると感じられたからだと思います。このようなあたたかい気持ちを忘れないようにしようと思います。今までは、家と学校との小さな社会の中での生活で精一杯でした。これからは少しづつ広い社会に目を向けていかなければいけないのかなと感じました。これを機会に社会に役立つことを考えられる人間になれるように努力したいと思います。楽しく有意義な時間をありがとうございました。

「仏教と鳴らし物」

コンサートを聞いて

塩澤　智裕

この春から私は社会人となり、今までと違う新しい環境に慣れるまで、随分時間がかかりました。学校に通っていた時と違い、休日でもなかなか気の休まる時間が過ごせなかったような気がします。今回のようなコンサートは、とても久しぶりでゆっくり聞くことができました。

琴やソプラノの音色をこんなに近くで聞くのは初めての経験でした。琴の演奏に合わせて一緒に歌い音楽をより身近に感じさせてくれました。

演奏された曲の中で高校の時よく聞いた覚えのあるものがありました。学校でよく流されていて、その時は聞き流す程度でしたが、改めて聞いてみると歌の意味を深く考えるようになりました。

仏教で使われている様々な道具には、それぞれ意味があります。値段も色々あるようですが、やはりどれも私にとっては珍しい物ばかりです。

今回のコンサートは、とても貴重な経験となりました。このような会を開いて人を集めるのは大変だと思いますが、次の会も是非参加したいと思います。ありがとうございました。

吉井町
鈴木　香世

お琴とソプラノジョイントコンサート、仏教と鳴らし物を聞きに行きました。ソプラノ歌手の人は、「琴とソプラノなんて合わないと思う人もいるでしょう。」と言っていました。けど私は、そんなことないとずっと思っていました。そのとおりで、琴とソプラノのハーモニーは、とても良いものでした。琴は、中学の授業で一度やりました。曲は、さくらでした。この日聞いた曲より、ずっと簡単なものでしたがここまで上手に弾けませんでした。

ソプラノの声も高く、そしてよく響いていました。私は、歌を歌うことは嫌いではないけど、音痴です。だから、自信を持って人の前で歌うことはすごいと思います。歌だけではなく、自分に自信を持っている人と持ってない人では何かが確実に違うと思っています。そして、私は自分に自信がありません。どうしても、まわりの人が気になるのです。そこまで自分で、わかっていても変わらないのは自分で変えようとする意思が少ないからです。私は、わからないことが多い。だからここへ、金剛寺に、志田先生の所へ来たのかもしれません。ずっと私は頭の中で、どんな方なのか考えていました。見た目は、思っていた通りの方でした。しかし、中身は違っていました。それは鳴らし物を紹介している時の、しゃべりでわかりました。ただ、しゃべるだけでなく相手の気をひくしゃべり方をしていました。見せるだけじゃ、聞かせるだけじゃ、こんなにおもしろいものではなかったでしょう。来ていた人が、笑い声をもらすことも度々あり、まだまだ子供の私でも仏教のことも聞くことが出来ました。高価な鳴らし物を見たり、魚みたいな鳴らし物を見たりしました。めったに見れるものではないと思うので、一目見れてよかったです。金剛寺までは、遠い道のりでしたが、この日来れたことはよかったことだと思います。また機会があれば、また来てみたいと思っていました。

次回催物

「落語と太鼓の夕べ」

月　日　平成18年９月22日
開　演　午後６時
場　所　真言宗豊山派『金剛寺』
☎　027－283－6918
会　費　１人　1,000円

ボランティア活動と住職と私

斉藤　克彦

私と住職との出会いは、二十年程前、ボランティア活動を目指す人を対象とした研修会で住職の講演を聞いたときに始まります。

当時高校を卒業し、化学会社の製造部門に就職。若者らしく自分の進路やアイデンティティーに悩みながらも、顔ではへらへら笑いながら仲間達と「大胡ＶＹＳ」というボランティア団体で活動していました。

「ＶＹＳ」は有志青年社会事業家の略で『社会の福祉と子どもの幸福のため』と言う目標を掲げ地域の子ども会活動のお手伝いや子ども達とキャンプなどの野外活動を行なっています。

当時の事を思い出すと、恥ずかしい事ばかり、思い上がりと勘違いの連続だったと思います。それでも『子どもを主体として、その自主性を尊重しよう』と言うテーマを持ち活動をしていました。そんな中、住職との出会いは私達の活動に一筋の光をもたらすものでした。当時「青雲会」という子ども会を主宰していた住職のお話は、私達の活動の裏付けとなり、多いに勇気をもらいました。

それ以降、大人の視点に乏しい私達のために、ある時は講師として講演をしていただいたり、地域の教育者の集まりにおいて、ＶＹＳの宣伝をしていただいたり、ことあるごとに私達のＶＹＳ活動の応援をしていただいております。

平成六年に私自身、大胡ＶＹＳで知り合った女性と結婚するに至り、多忙を極める住職に無理矢理仲人をお願いし、記念すべき第一号の仲人子となりました。

平成七年にあの「阪神淡路大震災」が発生、悲惨な状況とともにボランティア活動にも注目が集まりました。私達夫婦も震災発生一ヶ月後神戸に入りました。被災された方々の避難所での状況に圧倒され、看護師経験のある妻は、それなりに活動できたようですが、私は結局何も出来ず、自分の無力さを知り打ちのめされて帰って来ました。

その後住職と震災について話した時、自分が何も出来なかった事を打ち明けました。すると住職は「人の為に神戸に行こうと言う気持ちが大切なんだよ。」と言っていただきました。その瞬間、言葉では言い表せない想いが胸の中に込み上がってきた事を思い出します。

その年の十一月私達夫婦に初めての子どもが生まれました。暗い状況の中でも希望の光になってほしいと言う想いから「ひかり」と名付けました。

子どもは幸せな事に元気にすくすく育ちます。しかし、私達夫婦のような未熟な人間はその成長に付いて行けず、特に妻はずいぶん悩んでいたようです。折しも、親による子どもの虐待が新聞やテレビでセンセーショナルに報道され社会的にも注目の集まった頃です。

妻は家の中で子どもと二人きりになってお互いに煮詰まってしまうのを避けるため遊園地や公園、それに児童館へ出かけるようになりました。

特に児童館は、遊び道具がそろっ

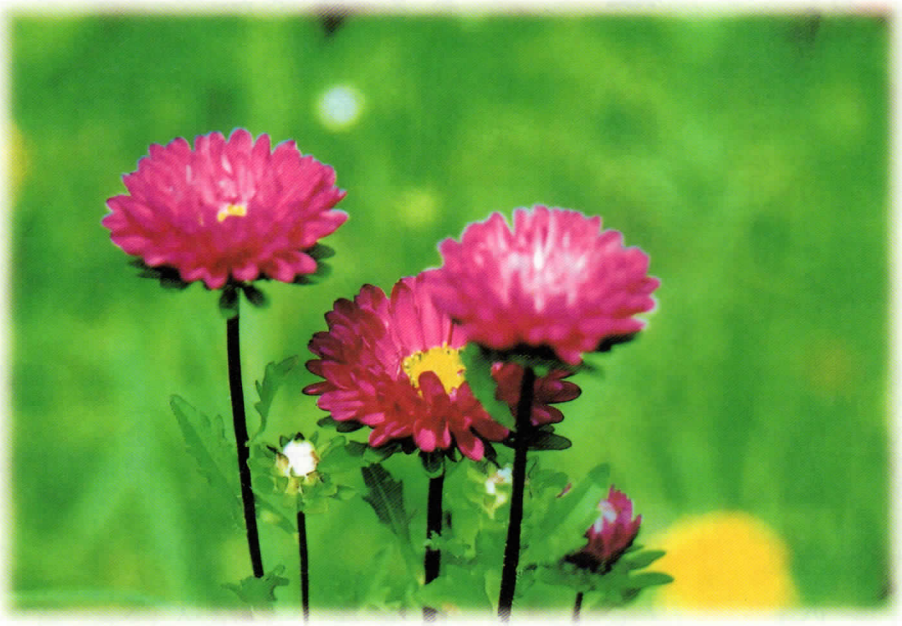
ており、就学前の子どもがおかあさんといっしょに遊びに来ているのでおかあさんはおかあさん同士、子どもは子ども同士で話したり、遊んだり出来るし、少し離れて子どもの遊ぶ様子を見ることが出来るので、今までにない発見もあったそうです。育児相談や関係資料がいろいろ手に入るのもよかった様です。でも私達の住む大胡町には児童館はありません。妻は車を走らせ粕川や前橋市日吉町の児童館へ通っていました。

「大胡町にも就学前の子どもと母親が集える児童館みたいな施設があったらいいのに。」妻は切実にそう思ったと同時に、例えばおもちゃの取り合いなど、子ども同士は了解していても親がその様子を見て黙っていられないと言うような、「お互い母親と子ども同士と言う事で遠慮や子育ての考え方の差から子どもを本当にのびのび遊ばせられているか。」と疑問も感じたそうです。

そんな中、家に遊びに来ていたＶＹＳの若者たちが我が子に接する姿を見ていて、「ＶＹＳなら上手く子ども同士の遊びの幅を広げ、子どもと親の関係の間に入って緩衝剤のような役割になれるのではないか？」と思ったそうです。

そのような経緯から妻が発起人となり、大胡ＶＹＳ主催『遊びの広場どんぐりころころ』が平成十二年九月に始まりました。現在も、毎月第一日曜日、九時～十二時、大胡地区いこいの家に於いて行なっています。記念すべき第一回は住職に講演と育児相談もお願いしました。

現在私は四十三才、三人の子どもの親となり、家のローンに追われ、へらへらと笑ってばかりもいられなくなりました。年齢的にも青年と言えるような状況にないのはよく分かっています。しかし、年々若いＶＹＳ会員が減少傾向にある中、活動の中心にいなくてもＶＹＳ活動の灯火が消えぬように周りから活動を応援していけたらと思います。私が若かった頃住職が私達にしてくれたように、彼らに勇気を与える事が出来たらと思っていますが、いつも逆の事ばかりしてしまっているような気がしています。「住職、今後も人生の師として御指導よろしくお願い致します。」



〈撮影　志田住職〉

法話　第三話

「命の尊さ」

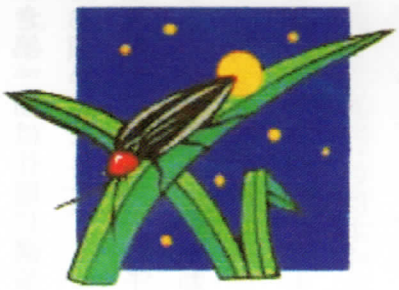
私は、命の尊さについて思う時、何時も脳裏をかすめる歌があります。その歌は、三十三歳で刑場の露と消えた青年の歌です。

刑場のつゆと消えはつ身をおしみ
　虫になりても生きたしとおもう

死刑が確定し、今日か明日かと執行日（死）を待たなければならない身にとって、せめてハエなどの虫になっても生きたい。その思い願望に胸迫るものを感じます。

私達は、今を生きています。いや生かされている事にどれほど感謝して、日々を過ごしているのかを心静かに考える事が今必要だと思うのですが。

彼（島秋人）は、さらに言います。『短い人生でも仏法に遭わせていただいたことによって、人生に光明を得た事は何よりも幸福でした。』と。



真言とは

真言とは、真実の言葉という意味です。人間の言葉では表現できない仏の世界、つまり宇宙の真理をそのまま示した言葉です。

真言は梵語（サンスクリット語）でマントラといい、もとはインドの民族宗教であるバラモン教の中で成立した言葉の様式で、神仏に語りかけるための聖語です。

内容は、本尊の種子（仏菩薩や神々をそれぞれ一字で象徴的に表した梵字）を示す一字のもの、本尊の徳をほめ讃える句からなるもの、教えを凝縮して説くもの、翻訳不能の句を連ねたものなど、たくさんあります。この真言は、弘法大師がその著『声字実相義』で、一字一句に無量の教えが含まれると言われるように、たった一字にも大日如来の説く無限の真理を含んでいるのです。

編集後記

平成十六年に創刊号を出させていただいた事を縁に、多くの方々より御意見をいただき深謝致します。

おかげさまで、第三号を発刊することになりました。

昨年開催致しました「ソプラノ・琴・仏教と鳴らし物」には、県内外より百人を越す方々が来寺されました。素晴らしい歌声と琴の音色に参加者一同心洗われる一時でした。又鳴らし物では法螺貝・太鼓・振鈴・馨・繞鐃・錫杖等の音に、それぞれ何かを感じ取っていただけた様子でした。

「金剛寺ホームページ」も、今月で一九、三〇〇人以上のアクセスがあり多くの方々に御覧いただき感謝の気持でいっぱいです。「メール相談室」も多くの人達に活用され、遠くはカナダ在住の方からもあり、全国的な展開になりつつあります。

今回第三号は特別寄稿に「本間光雄師（桐生市青蓮寺住職）」をお願い致しました。

また、檀徒であります「前原克司先生」「松村博美先生」そして、昨年のイベントに参加された四名「後藤加代子様」「塩沢智裕様」「丸若美和様」「鈴木香世子さん」と奉仕活動（ＶＹＳ）に積極的に取り組んでおられる「斉藤克彦様」には、厚かましいお願いを快く承諾していただき投稿をいただきました。この場を借りて厚く感謝を申し上げます。

合掌

住職記